

會



報

1965年4月

238

日本山岳会

哲学者の旅

伊藤秀五郎

カイザーリンクの日本旅行
エストニア出身の哲学者カイザーリンクの名は、わが国ではあまり知られていないが、一九一一年（明治四十四年）に試みた世界旅行をもとにして書かれた「一哲学者の旅日記」は、名著のひとつに数えてよい。地中海にはじまって、インド・中国・日本を経てアメリカ大陸横断に終わる旅行記であるが、かれが東洋思想に傾倒し、また造詣の深かったことが随所に読みとれる。かれはそれぞれの国の伝統的精神文化を尊重する思想家だった。日本に滞在した期間はみじかかったが、神戸に上陸した足で最初に訪れたのは、大和路から高野山である。当時の高野山や永平寺には、単なる観光地に墮した現在からは想像もつかない、昔ながらの情緒が濃かった。わが国の精神文化のふるりのひとつである高野山を、どこよりも先に訪ねたということにも、かれのすぐれた文化観がうかがえるのである。もしカイザーリンクが現在の日本を訪れたとしたら、どんな印象をもつだろうか。

現代文明と精神的自由

かれの十指にあまる著書のなかには、「America Set Free」という文明論もある。アメリカの物質

文化、機械文明を鋭く批判したもので、自由を建国の精神とし、自由であることを自負するアメリカに、はたして真の精神的自由は存在するか、というのが本書のテーマである。これも三十六年前に書かれたものであるが、この問題は、今日のアメリカでもやはり深刻な課題のひとつであろう。

現代を理解するためには、社会集団のメカニクスや、集団行動の社会学的分析などが、有効であることはいうまでもない。現代は、人間を社会という巨大組織の部品存在とする傾向が強いことも事実である。しかし、人間の自由意志とか倫理感覚とか宗教的意識とか、およそ物理的計測の困難な、自然科学の対象とはならない要素を省いて、政治や人間をただ機能的な側面からだけみる社会技術で、社会の矛盾を完全に解決できると考えるのは、おめでたい楽天主義だろう。アメリカのかかえている問題は、じつは現代の世界の問題でもあるわけだ。それはおそらく、人間が矛盾的存在であるという、人間の本性に根ざした問題だからである。

人間の本性、その理想と矛盾

人間は知的・理性的であることと、精神的・道徳的存在であることとで、他の動物と区別されるといえる。科学的な通念である。火や道具を使ったり、言語や文字を意志の伝達や記録や思想の表現に使えるのも、善悪の価値判断や、芸術の美的価値が成り立つのも、知性をつかさどる大脳皮質が高度に発達しているからである。その反面、人間は心理的に矛盾した存在である。人間を矛盾的存在とする、この素朴な哲学的規定は、じつは人間の本性をよく言いあらわした含蓄の深いことばである。矛盾的存在という人間の本性は、社会組織や生活様式や産業構造の変化によつて、たやすく変りうる性質のものではないだろう。そして、もしこの人間の本性が変らないかぎり、どんな理想社会が実現しても、社会問題はつきつきに起るに違いない。資本主義社会にしろ、福祉国家にしろ、共産社会にしろ、また将来誰かが考えだすかもしれない別の理想社会にしても、有限な存在である人間の所産であるから、理論としても完全ということは困難だし、かりに完全と考えられる理想社会が実現したとしても、社会はつねに動的に発展しつづけるものだから、新しい矛盾と調整は避けられない運命にある。

人間の能力は無限か

人間の能力を有限とみるかどうかということは、もちろん科学的、世界観にも関係する。たとえば、現在の原子物理学は、光子・軽粒子・中間子・重粒子など、十指にあまる素粒子を分析したが、しかしこれらの粒子が、物質構造の極限であるかどうかは誰にも分からない。これらの粒子をさらに分析すれば、おそらく測定範囲外の超微粒子の存在が可能だろう。科学が無能なのではなく、人間が有限の存在だからだ。宇宙旅行が可能となっても、人間が無限の創造力をもった絶対者となったわけではない。

自然の破壊を放置してよいか
自然保護の問題も、じつは産業開発、社会開発にともなつて発生する矛盾の調整の問題である。その意味では、技術上の問題なのだが、わが国ではマスコミも政治家も科学者たちも、これを国民的規模の政治問題として取り上げないことに問題があるのである。

カイザーリンクの訪れた五十年前のわが国の自然の面影は、いまはどこにも見ることはできない。かといって、われわれは、人力による自然の改変を、全面的に否定するのでも、回顧趣味の郷愁から未練がましく愚痴をいっているのでもない。産業開発、社会開発に名を藉りた手ばなしの自然の破壊を放置してよいのかというのである。世界のどの国よりも海外遠征には熱心なわが国の登山家たちが、お膝元の日本の自然保護には、おどろくほど不熱心なのは、

なぜなのだろう。鈴木大拙や大仏次郎のような人たちまで、真剣に自然保護の問題と取り組んでいるのに、何十年も自然を享受し楽しんできた山岳人が、ヒマラヤに行けばまだ生の自然は思う存分味わえるというだけに満足していいのだろうか。もうわれわれの手ではどうにもならない社会悪として、あきらめてしまったのであろうか。それとも、山には行くが、文学とか社会学とか物理学とかが専門で、自然美を論ずるなどとはもう時代おくれとでもいうのだろうか。

自然と文化

文化はもともと自然に対する概念である。これは中学生でも知っている常識だが、現代の社会において自然がどういう意味をもっているかということになると、世間は案外に無知なのである。

山や河原にころがっている自然石には、とくべつの意味はないが、それが庭の一隅に据えられて、たとえば竜安寺の石庭のような、すぐれた造園芸術の素材として生かされる、芸術的価値が生まれる。イタリアのカララの石切場に積まれた大理石は、四角な石灰岩にすぎないが、この石材から、あのヴィナス・デ・メディチやミケルアンジェロの名作、ダビッド像などが彫られたとき、新しい価値が創造される。地殻に埋もれた石炭が資源としての経済的価値をもつのは、いうまでもなくそれ

れに人の手が加えられると、熱エネルギーや電力を生ずるからである。水は自然物だが、それが飲料水や工業用水として利用され、あるいはエネルギーの転換がおきて電力となると、経済的価値を生む。文化とは、自然物に手を加えて、芸術的あるいは経済的価値を生むことであり、人類の歴史は文化創造の歴史でもあった。

自然開発と自然保護

しかし、現代のヨーロッパやわが国のように、すでに自然がほとんど開発しつくされた時代には、逆に、開発から取り残された自然そのものに、社会的稀少価値が生まれる。自然のままの自然に、人間によってはいけつして作り出せない価値がある。だから自然と開発との調整が、文明先進国ほど重大な社会問題となるのである。それは逆に、かつては存在しなかった価値が、自然に与えられたということである。資源や素材としての価値のほかに、新しい文化的意義の発見であった。

現代人は、古代人が求めたとは違った意味で自然を眺め、古代人よりも切実に自然美を要求しているのである。しかも地球の自然は、何十億年の時間をかけた宇宙の創造物であって、その意味で、人間の創作した文化財とは別の、人類共有の重要文化財である。これを適切に保護するのが、現代の英知というものであり、真の文明というものだろう。

アーヴィンのアックス(下)

(前号よりつづく)

また一九二四年の第六キャンプが昨年ロングランドによってなお残っているのが発見され、同じく一九二二年のフィンチのテントが吹きざらしの場所で布は風のためずたずたになつてはいたが、一九二四年自分たちが発見していることも見逃すわけにはいかない。一つの推測は、とくにこのような証拠不十分の場合、他の推測とさほど変りばえしないにしても、すべての事情から考察して、自分は、アックスの取り戻された場所がマロリーとアーヴィンの登攀途中にアクシデントの発生したところであると結論を下すわけにはいかない。またその場所が登りか、降りか、どちらの事故発生点かといえ、下降としたほうが一九二四年六月八日に自分(オーデル)の観察した状況と大体一致するようである。そして二人は頂上に達したであろうという可能性をなお自分は認めるのである。――

山崎安治

したらロンブック氷河まで落下してしまはずであること、下降中でなく登攀中、二人のうちどちらかがスリップし、他の一人がこれを止めようと同時にアックスを置き両手でロープをさばいたが止まきれず二人とも墜落してしまつたに相違ないこと、しかしこれらはいずれも憶測であり、その真相は依然謎である、とされている。そのくわしい考察は、M・E・マロリーの名著「エヴェレスト物語」の中によくふれられている。

オーデルのこと

オーデルは典型的なイギリスのマウンテニアールであった。とくに一九二四年、彼が目撃したマロリーとアーヴィンの最後について、一九三三年、謎のアックスが発見されて以来、いろいろな議論が沸騰し、多くの質問がオーデルに浴びせられ、中には、オーデルに対して非難の声をはなつ者も出たようである。こうした議論に対し、彼はじつくりと、ちょうど彼の山登りと同じように粘り強い調査を始めたのであった。

る第六キャンプの上まで二度も登り、二三、〇〇〇フィート以上の地点に十一晩をすごすという超人的な活躍を見せており、一九三六年にはナンダ・デヴィ(二五、六六〇フィート)に登頂し、戦前における最高峰登頂の記録をたて、つづいて一九三八年には第七回エヴェレスト登山隊にふたたび参加している。

「マウント・エヴェレスト一九三八年」の中でティルマンは、オーデルについて次のように紹介している。

N・E・オーデルは、アルプス、ロッキ、極地、およびヒマラヤで長い、豊富な経験を持つ第一級のマウンテニアールで、一九二四年エヴェレストでマロリーとアーヴィンのサポートをしたことはよく知られている。そして彼を登攀隊の一員に加えたのは遺憾とされている。一九三六年、ナンダ・デヴィにわれわれと一緒に登ったが、その時彼の四十七才という年齢からみて、大して期待していなかったのだが、あにはからんや、ほかの若い連中の誰よりもはるかに立派な働きを示した――。

アックスは誰のもの?

ウィン・ハリスによって、イギリスに持ち帰られたアックスは、いったい誰れの所持していたものだったろうか? ラトレッジは、マロリーのようにガイドレスで登山を行ない、自分でステップを刻

む一流の登山者が好んで求めるのが、ウィーリッシュのような名工の手になるアックスなので、多分マロリーのものではないかと推論し、また、一九二四年のエヴェレスト隊にはウィーリッシュのアックスがかなり多数支給されたので、あるいはアーヴィンのものであるという可能性もある、といっている。しかし、それを確認するすべもないままに、マロリーのアックスとして、アルパイン・クラブの図書室の壁にかけられることになったのである。

マロリーが一九二四年の遠征に先立ち、短期間ながらアルプスを訪ずれていたで、なおのことそれがマロリーのものと一般に信じこまれてしまったようである。それに疑念を抱いたのはいうまでもなくオーデルであった。

一一の刻み目

ワイン・ハリスにそのアックスを示されたとき、オーデルは、ほとんど少しも傷んでいないのに驚ろき、落ちてきたものとしても、そう遠くから落ちたものでないということを知った。特にオーデルの注意を引いたのは、シャフトにつけられた一一という刻み目で、その上から墨が塗ってあった。これはハリスもウエイジャーも見落していた、オーデルがはじめて発見したのだ。オーデルはすぐにアーヴィンの家族と、マロリー夫人に問い合わせの手紙を

出した。

マロリー夫人からは、彼女の記憶している限り、彼女の夫が所有物に一一というマークにしろ、何にしろつける習慣はまったくなかったという返答に接し、アーヴィンのものではないかという可能性を濃くしたのだが、アーヴィンの家族から当時返事がこないまま、確認することができなかった。さらにまた、ワイン・ハリスの意見によると、一九三三年の登山隊に加わったシエルパたちはサーブの所有物に目印しをつける習慣があった、現に問題のアックスの下部にも別に真新しい×印がしるされていたが、これは何でも手あたり次第に目じるしをつける習慣のあるハリスのサーバント、ボウルによつて下山の途中つけられたもので、一九二四年の登山隊にもこうした習慣がシエルパたちの間にあったのではないかとハリスはいつている。しかし、オーデルは一九二四年に、もしそういうことがあったとしても多くはなかったはずだ、とハリスの考えに反対している。

三十年の謎とける

アックスがエヴェレストの東北山稜の直下で発見されてから三十年の歳月が流れた。エヴェレストの頂上もすでに登られ、それ以後何人かの登山者がその頂を踏んだ。マロリーとアーヴィンの遺品は何も発見されなかったが、オー

デルはこの三十年の間、エヴェレストで発見されたウィーリッシュのアックスのことがいつときも頭から離れなかったに違いない。一九六二年、彼がパキスタンの旅からイギリスに戻ると、一通の手紙を受取った。旧友ヒュー・アーヴィンからのものであった。ヒュー・アーヴィンは、マロリーとともに消息を断つたアンドリュース・サンディ・アーヴィンの長兄で、サンディは五人兄弟の末弟であった。かねてオーデルからエヴェレストで発見されたアックスについて問い合わせをうけていたヒュー・アーヴィンは、ようやく一つの証拠を発見し、オーデルへ返事をしたためたのであった。

ヒュー・アーヴィンがたまたま亡父の遺品を整理していたとき、その中にシールスバリー士官養成所のスワッガー・ステッキ(軍人用指揮棒)を見つけ出した。このステッキには、一一という三本の平行の刻みが付けられていた。このような刻み目はシールスバリーにいた当時、自分も、現存している三人の弟たちも付けたおぼえはなく、確かにこれはエヴェレストで行方不明となったサンディが所持していたものに違いないと兄弟の意見がまとまった。またサンディ・アーヴィンは、自分の使用する道具の表面に彼の頭文字の簡単な組合せを印すのが難かしすぎるか、具合が悪いときは

一一という刻み目を付ける習慣があった、とヒュー・アーヴィンはオーデルへ知らせたのであらう。

アーヴィンのアックス

これまでくわしく調査もされず、マロリーの所有とされ、その旨を記したラヴエルが付されて、三十年間アルパイン・クラブの図書室にかけられていたアックスは、これで明白にアーヴィンのものであったということが証明されたのである。さらに念のためオーデルは、とくにアルパイン・クラブの会長と名譽書記の許可を得て問題のアックスをアーヴィンの家族の人たちに示し、スワッガー・ステッキに付けられた刻み目と照しあわせてみたところ、アーヴィン一家の人たちから、そのアックスは、まさにもなくサンディ・アーヴィンの所有物に違いないと証言されたのである。

したがって、エヴェレストの第六キャンブから東北山稜へ登攀中、北壁のストラブの上で、まずスリップしたのはマロリーで、これを止めようと、アックスをその場に置きロープを両手でさばいたが、止められず、二人ともロンブック主氷河へ滑落したという想定もなり立ってくる。これまで一般に考えられていたように、アーヴィンがスリップし、マロリーがこれを止めようとしたのではなからうか、という想定は、その逆にな

ってくるわけである。

長年の謎の一つをようやく解くことができたオーデルは、一九六二年十二月十日のアルパイン・クラブ定例総会の席上、とくにスワッガー・ステッキとエヴェレストで発見されたアックスの二つをならべて陳列し、その柄に刻まれた一一のしるしを会員たちに披露した。「これはやはりマロリーのものではなく、アーヴィンのアックスだったのだ。どうです、間違いはないでしょう。」といった感慨深げなオーデルの顔が眼に浮かぶようである。

しかし、アイス・アックスの身元が確認されたからといって、一九二四年六月の二人の最後となったクライムの際における、アーヴィン、あるいはマロリーの運命については、何も証明することができない、一とオーデルはアルパイン・ジャーナル第三〇六号のアルパイン・ノートの中で以上の物語りを結んでいる。(おわり)

本号目次

- ・ 哲学者の旅……………一
- ・ アーヴィンのアックス(下)……………二
- ・ 回想の岳人(2)……………四
- ・ 印度エヴェレスト隊員との交歓……………六
- ・ 医療連絡部だより……………六
- ・ 石鐘山……………六
- ・ 秋田支部、乳頭山小集會……………七
- ・ 会員通信……………八
- ・ 会務報告……………一〇

回想の岳人(2)

中 島 正 文

鳥水翁のこと その一

小島鳥水先生と相識したのはいつ頃のことだったろうか。先年の火災で日記や手紙類まで根こそぎに焼いてしまったので、今では一寸思い出せぬ遠い昔のことである。それにそも／＼の始まりが手紙の往復からであったから確かなことは思い出せないのも致し方が無いと観じて居る。

だが臘の記憶を辿って見れば、そうした手紙の往復は昭和九年の暮れの頃から始まったかと思う。鳥水先生が「山岳」第二九年一巻誌上に「上高地は神河内が正しき説」と言う有名な上高地の地名考証の論文を発表された直後のことであると思う。

当時、私は黒部奥山の史的研究に没頭して居る最中で、黒部峡谷についての資料はなんでもかんでも蒐集しており、峡谷背面の信濃地方の史料も関連して参考的に極力蒐集に努力していたので、この論文は頗る私の興味を惹き注目を浴びたわけである。

論文は嘉永刊本(執筆は天保十四年から)の善光寺道名所図会の記述を主として引用して、上高地と書くより、神河内の文字が妥当であり、正当であり、かつ確実であることを力説されたものであった。これにはまた高島章貞の「穂高岳記」をも参考にせられ、神河内開明の由来、穂高の神の縁起などを説かれてあり、当時の神河内の史的研究としては画期的な名文であった。

先生は同論文の中で、私は信州の人でないから、彼地の官府、または旧家の古記録

などを披閲する便宜に恵まれていない、一に坊間の古本(刊本)によるより外ない云々」と嘆いて居られる。それほどこの論文は名文であるが、確実な史料的なものを欠いており、一つに掛って先生の流麗な筆致が全篇を救って心憎い程の輝やきを見せているのであった。

私は一読するや否や感激の筆をとって二、三の申出をした。盲蛇に怖じぬ行為であったが、それが縁となって先生の御知遇を受け、以来お手紙の往復を許される迄になった。が、まだまだ先生は高嶺の存在であって、近寄る術もない田舎漢の私であつた。

それから間もなく、昭和十一年八月、名著「アルピニストの手記」が出版された。

この中に「山の書籍国を行く」の一項があり、加賀藩士神原守郁の選著、「立嶽登臨図記」一冊(旧高木文庫蔵本)を借覽瞻写せられた前後の事情を記され、更に内容を詳細に紹介されたが、記述中の

「国境近くの山々に餓鬼岳、後立山、杵山、コスバリ、北針ノ木山が聳えているが、後立山の名が、この時代の実地踏査図に見えているのもおもしろい云々。」

に私の目が留まり、
「次に立山絶頂の展望図があつて、立岳卓立山腰雪を積む、千尋、古人の所謂、雪山地獄あり何人をも煮むと欲す、とある。針木山辺、後立山脚下に緑々たり。と小物扱いにしてある。」

など等閑視できぬ文字に眼が釘付けられた。

立山絶頂における展望図に描かれた後立山連峯の写生図こそ黒部奥山研究者にとつては無くては叶わぬもの、それにこの図記は前田家尊經閣文庫にも見当らぬ稀本とあれば益々にも関覧の想を焦したが、まだまだ先生に借覽を申込むほど大胆になれぬ私だった。

処で昭和十三年春、私の三回に亘る黒部奥山研究の論文執筆が終つて、いざ発表と志すと共に、立嶽登臨図記を何としても一覽せねば論文に画竜点睛とはならぬと言う懸念が頻りに沸いて来た。矢も楯もたまず、当って砕けろと許りに不敵な借覽をお願いの手紙を先生に差出したものである。

實際その時はそうでもしなくてはならぬ私の焦燥であつたが、手紙を差出すと共に直ぐガクリとなつて後悔するノイローゼ気味の私でもあつた。

だが旬日を待たずに、稀本立嶽登臨図記は温かい先生のお手紙を具して、突如、実際に突如として私の机辺に姿を現わしたので、私の驚喜は絶頂に達した。

この時の私の昂奮ぶりは現に火災を免れて手元に残つた立嶽登臨図記の末尾に書きつけた註記でも判り、私の脳底にはその時のことが今も脉々と新鮮に影像される。

「本書の原本は日本山岳会の長老、小島鳥水先生の秘蔵せらるるものにして稀世の珍本たり。先生は余の懇請を諒せられ、写しを快諾せられて還々、御送本ありしを以て歡天喜地、即夜に筆を呵して写し了訖んぬ。昭和十三年三月十九日、於杏子文庫、中島杏子印」と書いた。

図記は美濃判の大本で僅か五葉の片々たるものであるが、中の二頁を占める信越の

山々から富士浅間までも加えた展望図は実に見事なもので、他に比類を絶したものであつた。

立山方面登山路や後立山の布置などは、図中に言断つてある通り、石黒信由の「三劄測量図籍」の範囲を出でぬもので、私には大して参考にはならなかつた。がそれは関覧してから後日のことである。

私は図記を抱き乍ら先生の大量量、学者通弊の物惜しみなどせず、快く秘蔵のものをも投げ出して後進を育成せらるるお心に衷心的感謝を繰返し捧げた。

越えて昭和十四年十月、拙著「黒部奥山と奥山廻り役」の別刷合冊発行に際して、またまた序文をと言う御無理をお願いしたが、これもまた快く応じていただけだ。

そうして序文の中で、

「私の欣ぶところは遠隔の都会にゐる学者では手の達かぬ資料を中島君に依つて発見又は初めて紹介されたことである。次いで私の期待するところは登山史はかうした生鮮な資料を按排して、骨組みに掛からねばならぬから、今の機会に、登山史の土台を根本的に築くべきものであるまいかと考へられる」と言う私には過分な身に余る言葉、お激励をいただいて奮躍したものであつた。

これから折り折り御消息を賜つたり、御署名入りの御著を頂戴して御懇情に感謝を重ねたが、戦争の苛烈さが加わるに至つていつしか無音に打ち過ぎて、先生の御身辺いま如何になどと考えながらまた、倉皇の日を重ねることが多くなつたことは面目もない仕儀であつた。

鳥水翁のこと その二

昭和十五年五月の山岳第三五年第一号誌上に鳥水先生は先年発表された「上高地は神河内が正しき説」を追い掛ける様に更に学究的に堅実な筆致で「神河内地名考」なる一文を発表された。この論文は主として松本藩編の信府統記（享保九年刊）信濃地名考（安永二年刊）の他に安曇郡誌など地方史料を引用されて、その内容を豊富に構成されたものである。

信府統記、信濃地名考などは従来から確實な史料として学界からも注目され、広く利用を見ていたものであるが、上河内の由来、史実については余りにも簡潔であり、概念的な記述で、考証的に論文の基本を置けぬものである。

従つて「神河内地名考」は在来の不明確な地名論に一步も数歩も進め得たが、確乎不動の決定打とはならぬものと評された。

私は昭和の初め頃から黒部奥山の登山史料と取組んでいて、越中黒部峡谷を取り巻く越後、信濃、飛騨方面の山岳古史料など手を尽くし足に任せて蒐集して居たが、漸く努力が酬いられて上河内方面の文献まで期せずして入手に恵まれ、筐底には相当量のもものが積まれて、何時か「神河内考」なる一文を草し、山岳史界の諸賢の批判を問わんと心に期して居た。そんな矢先きに鳥水先生の「上高地は神河内が正しき説」が山岳誌上に現われ、次いで幾年かの後に「神河内地名考」なる一文が加わったので、私は内心に大きなショックを受け心穏やかならぬものがあつた。

そこで急遽筆を執つて纏め上げたものが「神河内志」の一篇であつた。引用の史料

としては穂高神社の蔵本を始め地元の図書

館、営林署の古記録、松本藩山廻り記録、同庄屋記録の他に加賀藩尊経閣蔵書、石黒高樹堂文庫本、杏文庫本など根本資料を駆使して綴り、珍奇な古絵図をも添えて、昭和十六年の山岳第三六年第一号に発表した。

「神河内志」はそうしたわけで些か増長慢めいた自信過剰のもので、不遜にも各所に新説を立てたり、在来の所論を容赦なくキメつけたりして、山岳編集担当の方から言葉が荒いと注意を受ける始末であつた。

勿論、鳥水先生の御意にも些か忤る筆致を弄したことは、若気の至りとは申せ願ひて冷汗三斗の思いを繰り返したのである。

こんな思い上つた若輩の言論を鳥水先生は別段に意に介せられず、お叱りもなく「よく資料の採取に成功したものだ。よい参考になった」という意味の激励まで頂いて、何共寛仁のお心に頭が下つた。

当時、私のこの一文は松本方面の郷土史家達の反響批判を呼び、反響を覚悟して予め島々、稲核、大野川などの旧庄屋や素封家の手から恵まれた相当量の史料を半ば控置して応酬に備えたが、遂にそのことなく終つた。そうした史料は私にも一寸手に余るもので、これは提げて鳥水先生に御利用を仰ぎ、他日「神河内史」の総締めくくりをして頂くこうと思ひ、その機会を伺うことになった。

昭和十七年秋更けた某日、日本山岳会を訪れた翌日、私は靴の底に神河内の古文獻の二、三を秘めて省線阿佐谷駅に下りた。先生のお住居は直ぐ判つた。門内広く入込んだ閑静な手広い邸域で入口の狒犬の石像も面白く、流石に一代の風流岳人のお住い

と感に入つた。

恐る／＼案内を乞ひ刺を通すると、直ぐ夫人が出て来られて「主人は高血圧で倒れ永く病床に就いて居り、面会は禁ぜられて居ります、が遠路わざわざのお越しなので、何とかお目にだけ掛れましようが談話など覚束なく、御遠慮いただきいたいで」との気の毒そうに仰言るのである。私はそれと聞いて愕然としてたろろい。暫く御音を拝見せぬ内にこれはどうしたことかと仰天した。

先生の御病氣に障りがあつたらどうしよう。このまま辞去するのが当然でないか。しかし、ここまで来て先生に一目でもお目に掛れぬのも千歳の悔ではないか。と頗る逡巡し躊躇して居る玄関へ、關を排して寝巻姿の鳥水先生、かねて写真で見覚えある稜々たる瘦軀、けい／＼たる眼光にもやや疲れを見せて夫人に支えられ乍らドア口に立たれた。

私はハッと総身の緊張を覚え、何から言ひ出せばよいのか非道く上つてしまひ戸惑つた。何か平素の御厚情を感謝する言葉と、お目にかかれた嬉しさと御病氣の御見舞とをくどくどと申上げたようであるが、言葉にもなつて居らず、先生を僅かに微笑ませ、うなづかせた許りだった。私はお約束通り、夫人にお礼を述べて、先生の御快方を待つて改めて来訪したい旨を述べて踵を返した。

玄関を出て振り返ると、先生はまだ夫人に支えられて見送つて居られるのに恐縮して、慌ててまたピョコンとお礼を返したままそそくさと門を出た。阿佐ヶ谷駅までどう歩いたか夢中だった。

た。御病氣の先生に無理にお会いしたのを後悔したのか、一度お目に掛りたいという願いが満たされたので嬉しいのか、何共形容出来ぬ感情に混迷した。また先生とお会したのはホンの二、三分の瞬間のことであつたが、非常に長くも感ぜられもし、またアツと言う間に過ぎた様にも思われた。省線電車に乗り込んで、冷静を取戻し、初めて神河内の古文獻が靴の中にあることに気がついた。先生のお目に入れ損ねた古文獻など何となく色褪せた価値の少ない紙片のように寂しく思われた。

先生が昭和二十三年に御逝去になつてから先生に御利用して頂くと思ふ大部の文獻に手を着けるのが厭になり、その内の一書を「播磨上人の生涯と槍ヶ岳開山」と言う短文に使用したのみで今でも書架の片隅に眠っている。

近ごろ神河内のもう／＼の文獻や史料があちこちの書物に書かれて居るが、皆興味の無いもの許りである。大先輩の鳥水先生が御在世であつてこそ、上河内史論を提げて先生に楯つくことも、物申すことも大きな励みであるが、先生亡きあとの史論は何となく白らじらしく私は興味は薄いものになつてしまつた。

凡百の上河内の関係図書に接する毎に鳥水先生を想ふこと頻りである。（終）

△編者付記△

本稿は二二四号（三十七年十二月発行）に掲載の「回想の岳人」（一）の続篇です。原稿は早く届けられていたのですが、いろいろ事情で掲載がおくれましたことをここにわびします。

山縦横

山(やま)縦横(じゅうおう)
——篆刻 冠松次郎——

印度エヴェレスト

隊員との交歓

日 高 信 六 郎

一月下旬ニュー・デリーで開かれた会議に出かけたおり、あらかじめ三田副会長から連絡があったとて、サリン国防次官からお茶によばれた。

先年のエヴェレスト隊員で今回の隊長コリー中佐のお迎えで会場をぬけ出し、広大な国防省の廊下つたに次官の執務室に入り、そこに集まった軍服や背広のたくましい八名の人たちに紹介された。そのうち五名はこんどの隊員だとのこと、ヒマラヤ登山学校校長の顔も見えた。サリン氏は軍需関係の次官だが、立派な体格の持主であり、高所登攀の経験もあって、事実こんどの遠征の推進力となる最高責任者であるらしく、一同の

信頼を集めていることが窺われた。

初対面そうそう、どの遠征隊を率いて行ったかと聞かれたのには弱ったが、いろいろ問答するうちに、印度が国境守備に力を入れ、山岳部隊要員の養成と装備の国産化につとめていることがわかった。ダージリンの登山学校では登山者の適性すなわち山登りの強さの研究をすすめている説明に興味を引かれた。登山学校開設以来、行動中に死んだ二例について詳しく調べた結果、入学の際の調査項目を改めたこと、テンジンは「強さ」において優れているとはいえないが、「山の強さ」は抜群であり、ヒマラヤ登山に活躍している英国のダンシース夫人も五十を越えており「強さ」は大したものではないが「山の強さ」は非凡だといふ。

また高度順化の問題や、ドイツ隊のプモリ登頂(印度エヴェレスト隊のベースキャンプからその行動がよく見えたとして写真を示す)、中共のエヴェレスト登頂説などについても話に花が咲き、一同エヴェレストを目ざしては切り切っているさまが、気持ちよく感じられた。

日本隊のエヴェレスト登山計画については多大の興味を示して、いろいろ質問した上、シェルパその他について出来るだけの援助をするから遠慮なく申出でられたい

とくり返し、三田さんとの話合いから起こった日印婦人合同登山について近く返事を出す筈だが、この種計画は慎重に事を運ぶのがよいと思うとのことであった。

お昼まえ一時間たらずの会合であったが、こんどの短い滞在のうちいちばん楽しいついでであった。集った人々は左の通り。
Shri(Mr.) H.C. Sarin, Defence Secretary (Production); Lt. Commander M.S. Kohli; Major N. Kumar; Major Mulik(?) Raj; Major B.P. Singh; Captain A.S. Cheema; Shri G.S. Bhargava(?); Shri R.M. Chabraverty; Col. B.S. Jaswal, Principal of the Himalayan Mountaineering Institute.

「医療連絡部」だより

田 村 扇 一

数年前より医療連絡部が山岳会内に設置され、高所医学並びに山岳診療に関する諸問題の交換を目的として、毎年春秋二回集会を持つて参りました。

このたび昭和三十九年度夏期山岳診療所における受診患者数・疾患の内容がまとまりましたので御報告いたします。

なお、昨年度から厚生省国立公園部より各山岳診療所に對し、毎年おこなわれていた援助はなくなり、代わりに山岳会諸先輩の御尽

内 容		
骨折	10	
折臼挫	6	
捻挫挫創	164	
挫傷挫創	800	
異熱毒靴痔瘻	25	
熱毒靴痔瘻	102	
毒靴痔瘻	5	
靴痔瘻	303	
痔瘻	3	
瘻	5	
上腕神經マヒ	10	
その他	28	
計	2,267	
その他患者数	660	
総計	7,801	

力によって国立公園協会より御援助がいただけることになりました。援助額は一五万円で三十九年度は、各診療所に等分にわけ使用してもらいました。

一、診療所開設校数(医療連絡部参加校中の) 一二校

二、昭和三十九年度山岳診療所受診患者総数 七、八〇一人

三、疾患内容(別紙)

内科系疾患では、消化器系、呼吸器系疾患が半数以上をしめており、類高山病がそれほど多くなっているのが目につきますが、診療所になくてもよかった程度のものは他にかなりあったのではないかと考えられます。

外科系では、挫傷挫創が他をひきはなしております。

その他内科系で少数ですが、二日酔が一人・外科系で熱傷が一〇二人となっているのに注目させ

られました。

石 鎚 山

松 長 晴 利

展望の良さと森林の美しさが石鎚山系の良さであり、吃立した天狗岳と、頂上一帯が高原のように広大に拓け点々と白骨林を残す瓶ヶ森は、近年各地から多くの登山者を迎えております。

石鎚連峯でも石鎚山から東へ瓶ヶ森、笹ヶ峰へのコースは登山者の最も多いところですが。

石鎚山から西へ二ノ森、堂ヶ森のコースは昔ながらの残された縦走路ですが、バスが堂ヶ森山麓の保井野へ、また松山、面河間のバスが黒森峠を通るようになっており、登山者に親しまれるコースになりました。

このコースは森林と熊笹原と白

骨林が点在し、東方眼前に石鎚山と連峯の遙か彼方に剣山々系が眺められます。両側には坂瀬川、倉瀬谷、面河支流鉄砲石川、高瀬谷、雪瀑谷などの溪谷があって、何れも夏季の遡行と、雪瀑谷は積雪期登攀が行なわれておりまして、このコースは私達山岳人が守り、心なき登山者は遠慮して頂きたいと思っております。

施設においては十余年前と殆んど変わりなく、連峯の自然は保存されておるようにはみえますが、近年観光に名をかりて自然を破壊されつつあることは何処も同じで、石鎚山南面の面河に堰堤を造って下流の景勝地閼門から水を無くしたり、目下計画中のものに面河から土小屋を経て西条へ至る石鎚山スカイラインがあります。第一期工事として面河から石鎚山と岩黒山の間の土小屋までが予定されております。

やがて山脈を横断する一本の醜い線が現われ、一四九三メートルの土小屋にドライブを楽しむ人達の姿を見受ける時が来るでしょう。山の自然が益々荒らされることを思うとき、時代の流れに抗すべくもありませんが、せめて傷跡を最小限に止めて貰いたいものです。

石鎚山系はまだ白雪に覆われており、積雪も一メートル以上あります。(三月三日)

乳頭山小集會

秋田支部 荒巻広政

秋田をたつたのは、朝の十時半秋田支部の小集會をやろうと生保内(おぼない)に向つた、秋の陽ざしがボカボカ暖かい十月の二十四日である。大曲駅で乗りかえ生保内駅につく。駅前の羽後交通のバスセンターが立派な建物になっているには驚いた、これといふのはつい先き頃、この生保内から岩手県への道路六枚沢の急坂の難所を克服して国見峠への道が開通、橋場に出られることになって、盛岡方面からの観光バスが田沢湖や乳頭温泉郷に入るようになったからである。

生保内から田沢高原展望台(六五〇米)までの道路もよくなった、三十六年の国体登山の時や一昨年の日本山岳会小集會を駒ヶ岳スキー滑降と駒草荘でのきりたんぼで東京岳人を呼びつけた時には、石ころのデコボコと靴を没する泥ねいで、私はひや汗をかいて申訳をしたのであった、今日のこの道なら空を眺めていられそうだな——、と皆と話しながらバスは快適に走って行った。駒ヶ岳裾を廻るころ頂上は見えないが、中腹は一面に白くなっていた。

国立公園入口の展望台につく。春から見なかった半年の間に驚くべき発展振りだ。駒草荘と高原ホ

テルのみだったこの付近に山麓荘、ヘルセンター旅館、田沢湖町営の白樺荘、そして今建築中の観光ホテルや会社銀行の保養寮などあちこちに見えろのだ。やはり田沢高原は雪量も三米近く雪質も申分ないし、神秘の田沢湖を眺めながらの滑降はまたとない気分である。

展望台から奥への道はまだ元のような石ごろにゆられゆられて十五分乳頭温泉郷入口終点につく。先達川に沿って黒湯、孫六湯、蟹場温泉(がにば)の妙の湯、鶴の湯とあるが、いずれも昔ながらの素朴な温泉、湯船は板のところが多いいが、岩風呂もあり、湯籠はどこかの湯も沢山あって、農閑期は湯治客で満員である。

バスの乗り入れは協定でやめ、どの湯へも等距離の所を終点にしてある。徒歩十分位、十五分はかからない、下車して驚いたのは雪が十糎ほどある今夜の宿妙の湯(七六〇米)についたら主人が出迎え、昨夜の初雪だという。この湯の主人は仙北村高梨の出身で山の好きなどから、こんどの行を計画してくれた高田君が選定したのでなかなかの歓待振り、この宿は先達川に沿って半分は石をかむ急流の上に建てられているほんのバラックだが、二階の二室が一行の集會にあてられたのは大変なものでなしの意であつたらう。自家発電もなく、久し振りにラ

ンプの下で先ず支部談義、それから放談食となつたがご馳走とて何もない。きのこ汁を大鍋に持って来たがナメコならぬヌメメコのしょうゆ汁、余り皆すすまなかつたが、中には六、七杯といった者もいた、暗い風呂で雪も吹き込んで来たが割合いに暖まって吹雪の音も水の流れて消されてか何時か眠りについた。

翌朝は七時の食事また昨夜と同じきのこ汁とは驚いた勢揃い宜しくあるだけのものを皆着て乳頭へと出発、蟹場温泉の右手から孫六に出て先達川を渡って黒湯を渡って更に川を渡ると新道が開けていて雪の道も歩き易い。大釜温泉、一本松の湯を越えると急坂になる。雪も十五糎、この辺ぶな林の霧水、一昨夜の結氷まことにみごとな景観で予想もしなかった。今年初めての眺めである。

乳頭山(一四七六米)は駒ヶ岳と八幡平との縦走コースの中の最高のピークで岩手から見るとその名の如く鳥帽子岳、この初雪の頂上は二十糎の雪と水、さすがに今年の寒さになれない身には肌にとたえた。十時、頂上をあとに田代岱に下った。この山荘は二十人収容のブロック建て無人小舎国体に間に合わせてつくって通信班の根拠につかつた、田代岱は沼のある平坦地秋の紅葉時とは松の緑と合せて静かな自然の箱庭の景観で、ここからの乳頭頂上はその

名のように全くママの形である。田代岱からは旧道の岩場を割愛して新道を下つたが、雪はとけず泥ねいの道を歩かずすみ快適、途中二十名ほどの女性の団体に会ったが、その軽装に驚いて登山をあきらめるよう警告して置いた。妙の湯についたわれわれは持ち還つたにぎり飯の昼食をとった。思うに十月のこの山、まことに馬鹿には出来ない感にうたれた。たしか五年ほど前十月初旬である。本荘市の女性小川雅代さんは単独で乳頭登山をし、生死不明でそのままになっているからである。(四〇、二、二八記)

ある新制高校山岳部

四月、新入生を迎えると、まず丹沢集中登山、幕営、沢登り、夏には北か南のアルプス縦走、天幕持参で大きな荷物を担ぐ。秋になるとそろそろ冬山の準備とあって、新雪の谷川岳など。冬休みは八ヶ岳、仙丈、駒あたりまで出かける。

これで一年が経ってまた新しい学年を迎えるのだが、そのあいだ小さなヤブ山などはほとんど出かけない。スキーもやらない。経済的にも時間的にもやれないのである。トレーニングはもっぱら学校の階段の上り下り、屋上から懸垂下降のデモンストレーション。

山の本はほとんど読まない。秋の学校祭では一部屋を占領し、汚ならしい道具を飾り、山の歌のレコードをならし気分を楽しむ。

年齢的には旧制高校より二年幼ないわけで、知力、体力ともに劣る。ろくな指導者もなく、雪崩の知識もなく、よく事故がおきないものだと思う。東京都立の学校は二週間前に計画書を教育委員会に出して許可を受け、教員二名が同行することになっているが、計画の内容がチェックできるとは思えない。顧問は大てい若い新任の教師が押しつけられ、旅費と手当若干をPTAから貰ってしゅ／＼出かける。

大学とちがって山岳部長は生徒である。戦後の子供たちはなんでも自分で考え、実行することに慣れている。大人の言うことは聞きたがらない。

去年の暮もおしつまってから、東京都教育庁は都立高校に冬登山禁止を命じた、これは遅まきながらいいことだった。

——が問題はその後にある。学校が禁じても生徒は先輩（といっても怪しいのが多い）と出かける公算が非常に大きい。学校が公認するとならないとの違いは、わずかに学割証（運賃割引五割）が貰えるか、貰えないか、ただそれだけだ。高校生の登山指導、これは大へんむづかしい問題である。

(H・F)



山 賀 山 賀
H T
辰 沼 広 吉 園

会員通信

ナバリー島旅行

(絵はがき)

飯山 達雄

よき一九六五年の春をお迎えのことと拝察いたします。

山岳画家の山川勇一郎さんとチリーのサンチャゴで会い、たいたい地球最南端の村、ポルト・ウィリアムス（ナバリー島）に亡びゆくモンゴル族を訪ねてやってきました。

一月一日、チリー海軍の哨海艇でマゼラン海峡を南へぬけ、フェゴ島を迂回して、ベアグレ水道へはいりますと、午前三時に夜が明けましたが、この水道から見上げるダーウィン山脈（約二四〇〇米前後）は素晴らしい景観でした。

一日中、艇の左舷につきまとう氷河の山と、海中にたたきこむアイスホールの連続には、久しぶりに興奮を覚え、朝食、中食ぬきで二十一時までシャッターを切りま

くりました。いずれ三月末には帰日しますが、拝眉の上にて——

（一月三日、ナバリー島、ポルト・ウィリアムスにて、松方三郎氏あて。絵はベアグレ水道から見るダーウィン山脈の淡彩スケッチ、山川勇一郎）

小野岳に登る

小林 智明

日光街道が会津盆地へ入る手前、大川の左岸に、丸い山容ではかかる小野岳を湯野上温泉の宿から眺めていると、大きくてどっしりして、それでいてどこかおんびりしていて実に良い姿である。かつて戊辰の役には、この山を越せばめざす若松と、日光口の西軍は大内峠へ追迫したのであるし、会津軍またこれを越させて故郷の山河を凌辱されてなるものかと、守り仰いだ山でもある。谷文晁の「日本名山図会」にも見え、山麓の部落では朝日長者の伝説の山としてつたえられ、また春の筍採りの山として親しまれ、何となく浪漫的な魅力を持った山である。

会員田辺君が会津坂下へ赴任されたのを機会に井口、三留の両君も誘って、十一月二十二日新雪に化粧したこの山を訪ねた。

会津若松の駅前で弁当を買って入っていると弁当屋に小野岳へ筍採りに行った事があるという人が居いますよ、ほれあそこですよ、ち

ようど太陽がああの上き来るとお昼になるんですよ」と戸外に出て指さす方向を見ると、南にうつすらと白くなった堆形の小野岳が望まれた。屋敷山とは初耳であったが、のどかな感じでほほえましかった。

ところが昨夜来の強風と寒気で、雪を冠った小野岳は、径がないところへ持って来て丈余の陣竹が、笹葉の上に厚ぼったく雪を載せて待ちかまえていたからたまらない。小野下でバスを降り、小野観音の横手より沢状になったところをどん／＼高度を上げて、那須の山群が見え初める辺りより陣竹帯に入り、たつぷり二時間半の竹藪こぎは雪をはね上げ、ぬかる、ころぶの悪戦苦闘であった。加えて頂上へ着く頃は、会津盆地を越えてくる寒風きびしく、広い山頂の最北端にようやく三角点を探し当て、大内方面へ降る林道を見つけた時は、磐梯山もすでに夕映えであった。

沼尾へ降る予定を変更して、寒気と夕闇に追われるようにして大内部落へたどりついた時は、空腹も加わって今夜の泊りである芦ノ牧温泉までの夜道が大変と、部落の電話で湯野上からハイヤーを呼んでもらい、八時頃凍りついた衣服のまま「いし万」という宿へ上り込んだ。

湯に入り手足をのばすと、丸い月が寒空にのぼり、やがて大戸岳

の高さにせまらんとしていた。

東・北海道短信

帯 広 平野 明

日高山脈の雄峰ベテガリ岳（一七三六メートル）の頂上まで登山道（夏道）が出来ました。

広尾郡大樹町無願坂下部落から奥の日方川支流、ボンヤオロマップ岳（一四〇五・六メートル）を経て、ベテガリ岳へ一三、七キロメートル。ボンヤオロマップ岳、ベテガリ岳間は尾根づたいに七、四キロメートルあります。

車は、帯広市内から登山道入口まで国道二三六号線で坂下へ、それより日方川支流までは林道で、車が入ります。

「遙かなる山」と言われ、四月末でも小生など、西尾根づたいに往復九日間を要していたものが、約半分の日程に短縮されることになりました。

上川郡新得町に町営東大雪山荘（標高約七百メートル）が出来ました。十勝川上流トムラウシのユートムラウシ温泉の湯を利用して、沼の原山、トムラウシ山などの登山、高山植物観賞に利用できます。根室本線新得よりバス運行の予定（運賃三百円くらい）。（地図、十勝川上流、十勝岳、佐幌岳、旭岳、然別湖）

北日高、剣山（一、二〇四、四

メートル)のふもとに小屋ができました。根室本線狩勝峠(注、昭和四十二年からは新狩勝トンネルを通るため、雄大な峠の展望は見られなくなる)、新得、十勝清水を過ぎると右手に日高の山々が見えて来るが、そのうち一番近く、そしてその片りんが眺められる山、また岩登りのゲレンデとしてその東壁は最近注目されています。乗り物は国鉄御影駅、芽室駅から登山口の旭山まで国鉄バスが運行されています。(地図、御影)

雌阿寒岳(一五〇三メートル)の西の山麓、オンネトー湖畔に足寄町立のオンネトー青年の家ができ、利用が待たれています。阿寒原始林の中に建てられたこの青年の家は、静かな大自然そのまま、湯の滝からパイプで引湯された温泉に入り、ホールではフォークダンスもでき、雌阿寒岳へは約二時間で頂上に立つことができます。宿泊の申込みは、足寄郡足寄町足寄公民館あてです。なお、帯広から阿寒行のバスは年中運行しています。(地図、阿寒湖、上足寄)

この頃の読書から

吉沢一郎

毎月「山と溪谷」に横文字の山の本(登山ばかりではないが)を一冊ずつ紹介しているが、それも

もう三、四年続けているような気がする。

最近では中印バロ問題に関するものを三冊続けて読んで大部参考になったが、先月はテンブルの「ノウオク」(さあ行こう)を読んで、ニューギニアの最高峰が加藤泰安氏のと違うのでびっくりしてしまった。

今は(四月)少し古いですが、G・シーバーの「フランス・ヤングハズバンド」(探検家にして神秘主義者)を読んでいる。字が細かい上に三九一頁もあるが、内容はなかなか面白い。当時のインド省やインド政府のお偉方の頭の硬さや動脈硬化症状が皮肉交りによく書かれている。初巻物語もあるし、他の書にはないこともここには紹介されている。

日本人にも随分変な名前があるし、外国にもとぼけた名前のあることは先刻ご承知のことと思う。最近中部ヒンズー・クツシュに入ったドイツ隊のトーマス・陰鬱な天気氏などというのもおかしいが、若い夫氏なんていうのもまともではない。

この伝記の劈頭にその訳が書いてあるが、最初この一家の名前はオスワルドであった。そして後にオスボン又はオスバンと変化した、最後に二人兄弟の若い方がヤング・オスボンとして知られるようになった、遂にヤングハズバンドになったということである。

図書紹介

東海山岳(2) 一九六四

日本山岳会東海支部

東海三県の会員により三十六年に発足してから、朝日登山教室や、海外登山の企画など、めざましく積極的な活動をしている東海支部が立派な支部会報を創刊した。

目次の主なものは、(巻頭) 会報発刊によせて(松方三郎)、創行に思う(須賀太郎)、座談会、東海支部の歩みと今後の問題、「登攀記」積雪期四峰正面岩壁初登攀(一九五七、三)、屏風岩中央壁初登攀(一九五九、八)、屏風岩東壁初登攀(一九五九、一)、など十四篇、「紀行」原武氏遺稿、秋の山で、ほか四篇、「随想」内遊外飲(川喜田壯太郎)ほか三篇、「論説」遭難を防止するために(石岡繁雄)、二年後に見る愛知大遭難「三篇」、「研究」南極の山(藤森元夫)、「公務報告」などである。

座談会、東海支部の歩みと今後の問題(司会石原国利氏)は、支部の現在と将来の課題、会のあり方などについて真剣な論議が行なわれていて傾聴に値する。

B5版、一二六頁、写真四葉、図版多数

台湾・玉山と

周辺の山報告書

八幡製鉄山岳部OB会

昨一九六四年十一月四日、八幡製鉄部台、十一月十二日、玉山登頂、十一月十九日小倉帰着までの記録報告書である。

る。

一時は「忘却の彼方の山」となっていた台湾の山が、ふたたび日本の岳人の関心の的となってきた。大げさな遠征登山ではないが、軽遠征にちよびり気分が味わえる魅力、サラーマンの休暇日数、費用などの点でも、人様に迷惑をかけないで行ける、海外登山としての適当な線がそこにある。

と冒頭に書かれているが、一年数カ月の準備期間の後やっと実現できたよるこびと熱意は大きい。目次は1計画から出発まで、以下八項目に分れているが、そのなかで、2登山日誌、4装備について、5食糧、6医療、8会計について、などの項は今後渡台を企画する人々にとっても身近かない参考となるであろう。

隊員は隊長橋本三八氏ほか六名、同行者、台湾山岳協会余初雄氏21頁、B5版、写真一、図版台湾概略図、玉山(新高)附近略図、タイプ印書。

登山地図帳 65

九重、飯田高原
久住高原、万年山

加藤数功 編
橋本三八

六万分之一、色刷、折畳みポケット版、同じ会社と同じ企画で数多く出ている登山・ハイキング地図の一冊。主要コースを上り下りの所要時間が記入され、登山口から主要都市へのバスの時間が入り、読みかえやすい地名にルビが施され、名勝、植物まで記入されているが色分けしてあるのでわかり

やすいのがよい。中央部を長い九州横断道路が走っているのは、新しい時代を感じさせる。

裏面には全九州の案内図があり、本文四八頁は九重山の概説、九重登山の注意、コースの案内、地図索引などから成る。

発行所、日地出版KK 定価二二〇円

あしな 九十二輯

ヒマラヤの人

山村民俗の会

ヒマラヤも大がかりな探検の時代から個人の山歩きの時代へと移っている。山に個性を求め、山をいろいろな角度から自由に楽しむときが、ヒマラヤにも早く来てほしいものである。

山村民俗の会は、これまで多く国内の山を対象に民俗研究をつづけてきたが、こんど一年の月日数をかけて、機関誌「あしな」で、ヒマラヤ特集号を出した。珍らしいことであり、その幅の拡がりに将来への希望がもたれる。

無論わずか三十四ページの冊子であるから、到底大ヒマラヤの民俗のすべてを述べつくすことはできないし、印象的、断片的なところがあったとしても止むを得ないことであるが、これが動機となつて、これからアマチュアの民俗研究者の目が広く大陸へ向けられることを期待したい。

目次、ネパールの村人(篠田軍治)ヒマラヤの人たち(風見武秀)、キアラバンで拾った話(高橋照)、ネパールの住家と生活(石原憲治)、水河と熱帯の国の人々(向後元彦) 以上

(F)



辰沼広吉画

会務報告

三月理事・評議員会

四日・ルーム

△出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事 深田、折井、辰沼、山崎、金坂、松田、田村、村木、評議員 今西(錦)、青木、神谷、加藤、村井、吉沢、中田、富山支部長、石原、東京支部長、沼倉、飯野(委任) 望月、小原、織内、高山、藤木

△議事と報告

1 新年度役員(理事・監事)推薦のこと 新年度理事に加藤泰安、大塚博美、住吉仙也、飯野亨、宮下秀樹、竹田憲次、川崎敏、杉浦耀子以上八氏また監事一名は松本熊次郎氏に留任願うこととして推薦を決定した。尚退任予定の理事は折井健一、古沢肇、金坂一郎、山崎安治、高橋進、木下是雄、岩佐吉雄、梶本徳次郎の八氏、他は留任

2 通常会員総会開催のこと 来る四月二十四日(土) 本会図書室にて開催する。

3 協会主催「登山技術研究会」開催のこと 四月二十九日・五月二

寄贈図書(定期的刊行物) (38年11月~40年1月)

雑誌名	発行者(寄贈)
明峰山岳会	Vol. 33, No. 7, 8, 9-12
あしな	86~89, 93 山村民俗の会
京都山岳	1963-11, 12, 1964-1, 2, 3, 4, 5, 10, 11, 12 京都山岳会
冬山合宿計画書	東葉大山岳部
気象	No. 79~85, 90~93 気象協会
国立公園	No. 167~173 国立公園協会
R	1963-11, 12, 1964-1~4, 64-9~12, 65-1 国鉄
アルプ	69~75, 79~83 創文社
山と高原	326, 327 朋文堂
山と溪谷	298, 299, 301, 302, 303, 304, 64-11, 12, 65-1, 2 山と溪谷社
旅	1963-12, 1964-1~5 日本交通公社
ハイカー	98~104, 65-1, 2, 64-10~12 朋文堂
岳人	190~195, 65冬期別冊, 200~203 東京中日新聞社
岳友	11 大垣山岳協会
会報	6, 7 えぞ山岳会
山毛榉林	85~90, 94~99 広島山の会
OAC会報	12 大阪山の会
自然保護	27~32, 36~39 自然保護協会
足引	2 国大山岳部
夕管	夕管クラブ
踏跡	創刊号 防衛大山岳部
部内雑誌	東大スキー山岳部
剣岳遭難報告	東京理大山岳部
部報	2 亜細亜大山岳部
しらびそ	5 早大しらびその会
遭難の実態	31.4~38.3 明大遭難対策委員会
季報	2 札幌医大山岳部
夏山合宿報告	2 酒田工高山岳部
冬山計画書	北大山岳部
38春山合宿計画書	東京農工大山岳部
部報	1962-3 福岡大山岳部

雑誌名	発行者(寄贈)
山上(30周年記念号)	奈良山岳会
報告書	富士山をきれいにする会
春山合宿計画書	東葉大山岳部
尾根 創刊号	諏訪電々山岳会
NAV9	東京農大山岳部
春山合宿計画書	拓大山岳部
モルゲンロート7	上智大山岳部
冬山合宿報告書	上智大山岳部
部報	10 岡山農大山岳部
やま	9 早稲田山の会
年報	IV 明大山岳部
BERG 15	電機大山岳部
遭難報告	38-7 法大山岳部
東京オリンピック	15~29 オリンピック組織委
芙蓉新春号	富士急行電鉄
オリンピック	16~23 日本体育協会
体協時報	112~127
東京国際スポーツ大会報告号	"
雪と岩	1 日本登山学校
山書月報	38-11, 12 日本山書の会
都庁山岳部報	都庁山岳部
冷水小屋	北海学園
部報	1964 宮崎小林高
会報	71 山学同志会
報	2 北学大山岳部
台湾の山	秋田大山岳部
陸連時報	124 日本陸連
オリンピック時報	24 東京オリンピック準備局
OMCレポート	178~182 奥多摩山岳会
窓	17 神戸山岳会
Edelweiss	25 エーデルワイスクラブ
日本山岳会学生部年報	1 日本山岳会学生部
東海山岳	1 日本山岳会東海支部
TOJHE '63	都立大、府立大合同東部ネパール学術調査隊
国際観光情報	176 国際観光振興会
創業50周年記念目録山岳特報号	数字で見た国鉄 1964 悠久堂書店
母とみた旅	旅のエチケット採点旅行

日福島県新野地温泉にて福島支部の協力を得て担当日本山岳会と云うことで開催する予定。

4 台湾山岳協会より訪日登山隊派遣につき依頼のこと 周百鍊会長他十五名の編成により四月中旬、五月中旬約一ヶ月来日希望あり本会より招聘状を出すことを了承(尚韓国山岳会より学生を派遣し

規定について 原案につき再検討することとする(発表方法についても)

6 エグゼレスト登山準備の状況 NHKの方針が決定した(取材費一、五五〇万 助成費五〇〇万程度にてテレビのみとして、NHKよりの派遣は二、三名)のこれについて委員会が検討の上回答することになった。

7 協会海外登山審議会、三月三日

に第三回の会合あり山崎理事より概略報告あり。

8 本会の住居表示左記の通り変更三月一日より実施

山岳59年発行

山岳59年(一九六四)は三月十八日出来上り、昭和三十九年度の会費納入済みの会員に発送致しました。従って万一口会費未納の方がありましたら、この際至急御納め願いたく存じます。今回は従来より若干早目に作り上げましたが、60年の原稿も三分の二は集まりましたので、次回は更に発行月を早め、なるべく年末頃には出来上るようになりたいと考えます。原稿の蒐集、広告等の点で、会員各位の倍の御協力をお願いいたします。(望月)

山刊59年英文欄訂正

英文欄六頁上から四行目に以下を挿入する。

for Yangma Khola. Climbed Sya Kangri (c.6400 m).

Dec. 7 Gathered at Walungchung Ghola.

Dec. 9 Departed from Walungchung Ghola for Tsudam over Tanje La (5100 m). On the way, climbed 2 minor pks (Tanje Kangri, c.5600 m).

Dec. 12 Reached Tsudam.

Dec. 15 Divided into 2 parties as follows: A) 2 members (Hirano & Tatum) & 1 Sherpa (Ang Thakky). Reconnoitered Three Sisters ranges and climbed 3 minor pks. (Sanne Kangri, c.5700 m). Over Tanga La, through Topke Ghola, Dawan and Chaintpur Bazar, reached Dingla Bazar.

B) 2 members (Ishinabe & Miya-

支部通信 JAC TOKAI 1.2.3 JAC 東海支部
 部 報 10 広島大山岳部
 山 恋 5 法大女子山岳部
 田部重治氏寄贈図書
 霧藻創刊 3 安田山岳部
 慶応義塾WV会誌創刊 慶応義塾WV
 英彦山耶馬溪地区国 大分、福岡、熊本
 立公園候補地資料 国立公園促進会
 登高行 2 年 慶応山岳部
 山 行 1 東京女子大山岳部
 旅 10 桐陰山岳部
 外濠創刊 法政高師13年卒業生
 山想 2,3,4,5,6 法政山岳部
 佐渡の地質と植物1集 国立公園期成同盟会
 霧の旅 37,38,40,42 霧の旅会
 アタック 1 札幌二中山岳旅行部
 奥日光の観光資源 金精峠有料道路開設協議会
 支笏洞爺国立公 支笏洞爺国立公園
 園指定経過記録 指定記念協議会
 桜島、佐多、開聞、指 鹿兒島県
 宿、屋久島、前後篇
 弥彦山脈 新潟県教育庁
 妙高戸隠の自然 新潟県
 秩父多摩国立公園 東京、埼玉、山梨、長野
 伊豆七島噴火史な 東京都公園観光課
 らびに地形地質
 針ノ木岳 大町山岳博物館
 田辺主計氏寄贈図書
 山創刊 2,4,5 日本山岳会

第5回技術講習会延期について
 五月十五、十七日、北岳大樺沢に
 て開催予定のところ、積雪状態不安
 定のため、七月中旬まで実施を延期
 します。
 東京支部

moto) & I Sherpa (Hiakpa Ten-
 zing).
 右は筆者平野征人氏の当初の原稿に
 脱落していたもので、同氏から挿入の
 通知をうけたときは、既に印刷が終っ
 ていたため、訂正出来なかった次第で
 ある。(望月)

(三十七号訂正)

誤 正

1 頁3段 この登山隊↓この登山家。

7 頁4段 山文学↑山岳文学

” ” 蝶類名称類纂の発行年明治
 四十年四月十日

12 頁3段 特種なコース↓特殊なコ
 ス

15 頁1段 春日俊郎↓春田俊郎

11 頁4段 図書紹介「山伏」和歌森太
 郎著の奥付記載洩れにつ
 き追記します。

新書版、一九六頁、昭和
 三十九年九月五日、中央
 公論社発行、中公新書48
 価二〇〇円。

13 頁2段 一月理事・評議員会

海外登山審議会委員の氏名に
 松田雄一氏を追加

本年度から会報が月刊になる模様で
 す。会報の使命上当然そうありたいも
 ので一層のご協力を願ってやみませ
 ん。

昭和四十年四月二十五日発行

東京 都 渋谷区 神宮
 前3ノ三 外苑コ1ボ内

発行所 社団 日本山岳会
 編集者 古 沢 肇

頒価二十円 電話(電)六、五〇一、五
 振替口座東京四八二九番

印刷所 東京港区赤坂堀五番地
 株式会社 技報堂